

日野稲門会報

総会だより

＊
日野稲門会
事務局
＊

森田方
日野市日野本町
2-16-3
☎042-581-4088

第21回総会は、12月3日、日野市勤労・青年会館において、会員32名が出席し、開催されました。

第1部の総会では、千田吉郎会長の挨拶(会長欠席のため森田事務局長が代行)のあと、11年度事業報告・会計報告が満場一致で承認されました。

さらに、各同好会幹事から、今年度の活動報告と次年度の計画について説明がありました。

その後の役員改選で、千田会長が健康上の理由から退任され、後任の新会長に、森田治夫事務局長が、事務局兼任のまま選任されました。

第2部は、当々会員の西海英雄法政大学工学部教授により、『世界の若者』と題した講演が行われました。(裏面に講演の要旨を掲載)

引き続き、会場を豊田駅前前の杏花飯店に移し、懇親会が開かれ、会員相互の交流を深めました。

千田会長から バトン 森田新会長へ タッチ!

日野稲門会第21回総会報告

● 総会挨拶 ●●●●●●●●●●

日野稲門会々長 千田 吉郎

本日は、12月に入った総会にご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

前回の総会は、来賓の総長の都合により、1月に開催されました。

今年は少し繰り上げる予定でありましたが、種々の事情で、本日開催の運びとなりました。

この会を創立して20年になりますが、その間ご協力いただきましてありがとうございます。本来ならば、総会に出席してご挨拶するべきですが、あいにく急に出張することとなり、申しわけございません。

すでに会報で述べましたように健康上の理由と会の若返りを図るために、私は今回で退くことといたしました。

本日の議事につきましては、よろしくご審議願います。今後は、若い方々の情熱を持って、この会がますます発展されますようお祈り申し上げます。

会長就任にあたって

日野稲門会新会長

森田 治夫



このたび総会において、信任を得ました、森田でございます。

昨年4月から、私が事務局を担当しました時から、本年の役員改選につきまして、若返りを図るべく、会長とも協議してきました。

その結果、現幹事15名のうち、今年新たに幹事をお願いした方は、7名で、昨年は3名でした。

今年、千田先輩に会長の続投をお願いし、若い方々に副会長を就任していただき、その後、会長交代を目指してまいりました。

《平成12年度役員》

会長・事務局	23専政	○森田	治夫
副会長・監査	30商	○木村	三郎
〃	34法	○嶋崎	巖
〃	39法	○有山	董
〃	40経	○小笠原	豊
幹事(事務局補佐)	26法	嶋田	富次
〃	30経	祖母井	美章
〃	30商	石坂	松男
〃	35教	山内	治男
〃(会報担当)	37教	阪本	昭夫
〃	38独	下重	光
〃	40応化	永山	肇
〃	41政	山口	隆一郎
〃	61土	土肥宏	賢司
〃	平3工研	佐藤	

(○印は、新任)

《訂正とおわび》

「日野稲門会報」第10号の2頁に掲載した〈会員だより〉の記事で、石坂松男氏と西村米子氏の文章に挿入された写真が入れ違えたまま掲載されました。訂正して、おわび申し上げます。

しかしながら、このたびの千田会長の辞任表明により、一時は、当会の休眠の提案をいたしました。幹事会で否決されました。そこで、さらに再出発の形を模索してまいりました。

結局、若返りの方針には沿わない形となり、前会長から、強いお叱りを受けましたが、ご承認をいただいた形になりました。

しかし、今回副会長および幹事の方々は、若返りが図られたと思えます。

以上、これまでの経過について簡単に申し上げます。

今回私が会長に信任されましたからには、浅学非才の身ではあります。当会発展のために専心尽くすつもりです。そして早く、前会長が望まれた若返りを図りたいと念願するものであります。

次に、私が事務局も兼任することにつきまして、申し上げます。

祖母井さんが、別の仕事の都合もあり、事務局専任がむずかしいうえに、他の幹事にいきなり押し付けるわけにもいかず、自分、私がお引き受けすることにしました。

ただ、とかく、一人で切りまわしますと、世間で独断専行とか言われるものです。もし皆さんが、そのように感じられたときは、遠慮なくおっしゃっていただきたいと思えます。

なお、今後の方針としては、次の二つを考えております。

1 同好会活動の拡大を図る
例えば男の作る酒の肴、つまり料理教室、パソコン入門指導ほか。

2 総会の繰り上げ開催
昨年は、総会の開催が、三多摩稲門連合会の都合で、年を越してしまいました。13年度の総会は、

13年の9月ごろに、14年度を次年6月ごろに、順次繰り上げて進めていきたいと思っております。

演 講 世界の若者

法政大学工学部教授
日野稲門会々員

西海 英雄

◆ 最近の若者像

私は、大学の教員として、若い人たちと接する機会が多いので、最近の若者たちについて考えたことを、述べさせていただきます。

先ず皆さんが持ちになる「若者」という言葉には、「好ましくない」というイメージがあると思います。「平然と電車の中で化粧をする」「キレる」。また「他人とのコミュニケーションができない」など。

それでは、現代の若者はダメなのかというと、それには私は反対します。

それは、スポーツ界を見てもらえば、

《西海英雄先生プロフィール》
昭和三十二年、早大理工学部応用化学、同47年工学研究科卒業。工学博士。平成9年には、オランダデルフト工科大学、カナダアルバータ大学の客員教授も歴任。



うとわかります。

伊達公子さんや野茂選手のように、一人で海外に出ていって、孤独に耐えながらがんばっている、素晴らしい若い人たちがいる。これをみると、日本の将来は決して暗くないと、私は思っております。

◆ 世界の若者の現状

まずオランダです。オランダの若者は、個人の自由を大切にします。

また、大学生は日本と同じように、親が面倒をみています。大学は国立しかないので、授業料はタダですが、基本的には親がかり。オランダは宗教的には新教と旧教のぶつかる所です。しかしオランダは、キリスト教をベースにものを考えることは、まったくありません。

次にドイツ。ドイツは、考え方が日本よりも古い感じがします。私の知人のプロフェッサーに、ニューミュージックで有名な息子がいる。しかし、プロフェッサーにとつては、その息子を家の恥だと考えている。

そういう意味でドイツ人は、かなり考え方が古いようです。

また東ドイツは、統一後十年になりませんが、経済的にはまだまだひどい状態です。失業者も目につきますし、貧富の差、教育の差が激しいようです。

次はチリ。人口の約10%が大学へ行きます。大学は公立が約60%で、親は子どもが高校を卒業するまで面倒を見ます。そして大学はローン(奨学金)でまかないながら自活をします。

子どもと親との経済的な関係は日本と同じように、独立した時点で、プツンと切れます。

次は、北米のアルバータ(カナダ西部の州)にいた時の話です。

この国では、大学レベルになると、子どもと親はまったく無関係になります。親からお金をもらって大学へ行くようなことはない。

学校の休みに働いて、授業料と下宿代を稼ぎながら大学を卒業する。そして、いい職につき、高い給料をもらうために、苦労して大学で学ぶというのが、彼らの平均的な考え方なのです。

最後は日本の大学生について。彼らは、授業の出席は大好きですが、勉強はしません。指示待ち学生」というのか、何か言わないとやしません。

実験の時間でも、実験しているのは、一人の学生で、他の学生は周りでそれを見ている。

また、悪い学生ばかりが目立ち、出来る学生は、目立たない。だから目立たない優秀な学生をよく見て育てることが、私の授業に対する認識なのです。

以上が、世界の若者のおおよその現状だと思います。

◆ 子どもの無知は親の責任

私の近くの研究室にいる女子学生の中に、「へねじまわし」の使い方や、「ヘビューズ」がどんなものなのかを知らない学生がいて、驚かされました。

このような学生にしたのは、結局は、その子どもの親の責任です。

「三つ子の魂、百までも」という言葉のとおり、子どもが小さいときに親が教えたり、経験させなくてはいけないことがあると思う。

いろいろなることを経験させるといことは、積極的に人生を生きるといことを、子どもに与えることだと気がつきました。

だから金だけで解決をして、危ないことをさせないということは、結局子どもから積極性を奪っていることだと思います。

従って、若者がダメになっっているのは、親である自分たちが作り上げているのだと、私は思うので

◆ 民主主義の危機

親、特に父親が子供の教育を怠るのは仕事に忙しいためであるとの考えがあります。確かに一つの要因ではありましょう。しかし、若者の無知はアメリカも、ヨーロッパも嘆かせている共通現象なのです。これは、民主主義が必然的に持つ悩みなのではないのでしょうか。

封建時代には、「君に忠、親に孝」が最上位の原則でした。では、民主主義の最上位の道徳原則は何でしょう。これが、明らかにされなければ大多数の親は子をどのように教育したら良いかわかりません。それが、この混迷を生み出している最大の原因ではないでしょうか。民主主義は、個人としての原則を持ちえても、社会として共通認識の行動原理としての道徳をいまだ持っておりません。それが人々に自信を失わせ、自分の子供を教育できないのではないかと思っています。

20世紀は科学と技術の時代と言いますが、21世紀は心の平安を探る時代かもしれませぬ。

この記事は、平成12年12月3日の日野稲門会総会で行われた講演より抜粋し、その要旨を編集室にてまとめたものです。